

## コアユ資源予測調査の歩み

年	<b>卵</b> —産卵調査 <b>ヒ</b> —ヒウオ生息状況調査 <b>探</b> —魚探調査 <b>予</b> —漁況予測 <b>漁</b> —漁獲状況調査
昭和5～7年	<b>卵</b> 産卵生態の調査が行われる。
昭和15年	<b>ヒ</b> 角形幼生網を含む3種類のネットを用いてヒウオの調査
昭和17・18年	<b>ヒ</b> 角形幼生網を用いてヒウオの調査
昭和19年	<b>卵</b> 単位面積当たりの産卵量を調査
昭和21年	<b>予</b> 秋期降水量、冬季湖水位とアユ漁獲高との関係により漁況予測を行う。
昭和22年	<b>卵</b> 産卵盛期に4河川の産卵調査開始 <b>予</b> 秋期降水量とアユ漁獲高との関係により漁況予測を行う。 <b>ヒ</b> 丸形ネットを用いてヒウオの調査
昭和23年	<b>ヒ</b> 角形幼生網を用いたヒウオ生息状況調査がこの年以降継続(4水域) <b>卵</b> 産卵調査の調査河川が11河川になる。
昭和30年	<b>ヒ</b> ヒウオ遊泳層調査により6～8mでヒウオが最も多く採集される。
昭和31年	<b>探</b> 魚群探知機を用いたコアユ群の動静調査が行われ、日中は30m層で群を形成し、夜間は分散することが明らかとなる。
昭和34年	<b>卵</b> 産卵調査が産卵期間中の調査となる。 <b>探</b> 魚探調査開始、コースは北湖の北部沿岸 <b>ヒ</b> ヒウオ生息状況調査水域が8水域となる。
昭和35年	<b>ヒ</b> 角形幼生網の網地が合成繊維となる。
昭和36年	<b>ヒ</b> 曳網方法がマニラロープ2本曳の手繰揚網方法からワイヤーロープ1本曳のウインチ揚網になる。
昭和47年	<b>ヒ</b> 餌料生物量調査(夜間動物プランクトン調査)開始 <b>漁</b> 漁獲アユの体型調査開始
昭和52・53年	<b>卵</b> 琵琶湖に流入する仔アユ量の調査が大規模に行われ、産卵調査の有効産着卵数の約2倍量の仔アユが流下することが明らかとなる。
昭和53年	<b>探</b> 魚探調査のコースが北湖の南部沿岸も加わる。
昭和58年	<b>探</b> 魚探調査のコースが現在のコースとなる。
昭和59年	<b>ヒ</b> ヒウオ生息状況調査水域が9水域となる。 <b>予</b> 重回帰分析法による漁況予測の開始
平成2年	<b>予</b> ヒウオ採集尾数と積雪日数から年間漁獲尾数、年間漁獲魚平均体重、年間漁獲重量の値を回帰分析により予測。